

日 本 国 特 許 庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出 願 年 月 日 2 0 0 3 年 9 月 2 2 日
Date of Application:

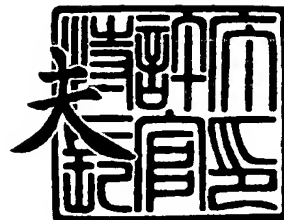
出 願 番 号 特 願 2 0 0 3 - 3 2 9 4 5 3
Application Number:
[ST. 10/C]: [J P 2 0 0 3 - 3 2 9 4 5 3]

出 願 人 ミノルタ株式会社
Applicant(s):

2 0 0 4 年 1 月 2 8 日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

今 井 康



出証番号 出証特 2 0 0 4 - 3 0 0 3 7 4 2

【書類名】 特許願
【整理番号】 190844
【提出日】 平成15年 9月22日
【あて先】 特許庁長官殿
【国際特許分類】 G03G 9/08
【発明者】
 【住所又は居所】 大阪府大阪市中央区安土町二丁目 3 番 1 3 号大阪国際ビル ミノ
 ルタ株式会社内
 【氏名】 城戸 謙一
【発明者】
 【住所又は居所】 大阪府大阪市中央区安土町二丁目 3 番 1 3 号大阪国際ビル ミノ
 ルタ株式会社内
 【氏名】 町田 純二
【発明者】
 【住所又は居所】 大阪府大阪市中央区安土町二丁目 3 番 1 3 号大阪国際ビル ミノ
 ルタ株式会社内
 【氏名】 山本 淳史
【発明者】
 【住所又は居所】 大阪府大阪市中央区安土町二丁目 3 番 1 3 号大阪国際ビル ミノ
 ルタ株式会社内
 【氏名】 安野 政裕
【特許出願人】
 【識別番号】 000006079
 【住所又は居所】 大阪府大阪市中央区安土町二丁目 3 番 1 3 号大阪国際ビル
 【氏名又は名称】 ミノルタ株式会社
【代理人】
 【識別番号】 100086405
 【弁理士】
 【氏名又は名称】 河宮 治
 【電話番号】 06-6949-1261
 【ファクシミリ番号】 06-6949-0361
【選任した代理人】
 【識別番号】 100103115
 【弁理士】
 【氏名又は名称】 北原 康廣
 【電話番号】 06-6949-1261
 【ファクシミリ番号】 06-6949-0361
【手数料の表示】
 【予納台帳番号】 163028
 【納付金額】 21,000円
【提出物件の目録】
 【物件名】 特許請求の範囲 1
 【物件名】 明細書 1
 【物件名】 要約書 1
 【包括委任状番号】 0113154

【書類名】 特許請求の範囲**【請求項 1】**

コア粒子表面にシェル層を有してなるコアシェル構造型トナー粒子を含有する静電荷像現像用トナーであって、コア粒子が極性基を有するワックスおよび着色剤からなり、シェル層が軟化点 6 0 ～ 1 2 0 ℃ の結晶性ポリエステル樹脂をシェル層構成樹脂全体の 7 0 ～ 1 0 0 重量%含有することを特徴とする静電荷像現像用トナー。

【請求項 2】

極性基を有するワックスが結晶性ポリエステル樹脂より軟化点が低いワックスを少なくとも 1 種類含むことを特徴とする請求項 1 に記載の静電荷像現像用トナー。

【請求項 3】

コア粒子が極性基を有するワックスと極性基を有しないワックスを含有することを特徴とする請求項 1 または 2 に記載の静電荷像現像用トナー。

【請求項 4】

ワックスの含有量がトナー粒子に対して 1 0 ～ 5 0 重量%であることを特徴とする請求項 1 ～ 3 のいずれかに記載の静電荷像現像用トナー。

【書類名】明細書

【発明の名称】静電荷像現像用トナー

【技術分野】

【0001】

本発明は静電荷像現像用トナーに関する。

【背景技術】

【0002】

電子写真方式の画像形成装置に使用される静電荷像現像用トナーは少なくとも樹脂および着色剤を含有してなり、通常はさらに高温オフセット防止と低温オフセット防止のためにワックスが含有されている。高温オフセットとは加熱しすぎにより、熔融したトナー像を形成するトナーのトナー間凝集力が弱まり、トナー像の一部が定着ローラーに移行し、そのトナーが次の記録媒体（紙など）に付着する現象である。低温オフセットとはトナーを熔融するための熱エネルギーが不足し、定着ローラーに近い側のトナーのみが熔融し、記録媒体付近のトナーが熔融せず、結果として、定着ローラーとトナーの付着力の方がトナーと記録媒体との付着力よりまさり、定着ローラーにトナー像が付着し、そのトナーが次の記録媒体に付着する現象である。また、トナー粒子表面に着色剤やワックスが露出すると、トナー粒子と接触する感光体や現像ローラーなどの部材へ着色剤やワックスが移行し易くなるため、フィルミングなどの画像ノイズが発生する問題がトナーの有する本質的な課題として存在していた。

【0003】

またトナーにおいては低温定着性と耐熱保管性という互いに相反する特性が要求されている。低温定着性とは比較的低温で記録媒体にトナー像を十分に定着させ得る特性である。トナー像の定着が不十分であると、記録媒体（例えば紙）上の定着画像を折ったときに媒体が露出するような画像の剥離が生じた。そのような剥離が生じなかったとしても、画像表面が剥離し、画像に凹部（表面剥離）が生じ、画質上の問題となる。そのような低温定着性を向上させるためにはトナー構成樹脂として、熔融温度が比較的低い樹脂を使用する手法が考えられる。しかしながら、そのような手法を採ると、樹脂のガラス転移点も低下するために、比較的高温での保管時に凝集が発生するという耐熱保管性低下の問題が生じた。また、画像保管性も低下した。画像保管性は、電子写真プロセスを通った後の画像が形成された記録媒体の保管性に関するものである。画像保管性が低下すると、画像（特に両面コピー）を重ねて高温（50℃）で保管した場合に記録媒体がひっついて、はがすと画像がとれてしまう。

【0004】

低温定着性と耐熱保管性との両立を目的としてコア粒子表面にシェル層を有してなるコアシェル構造型トナー粒子において、コア材として低軟化点樹脂を用い、シェル材として高軟化点樹脂を用いる技術が報告されている（特許文献1および特許文献2）。コアの軟化点を低くして粘性を下げ低温定着性を改善し、シェルは高軟化点物質で耐熱保管性を改善しようとするものである。高軟化点樹脂としては非晶性樹脂が使用される。そのような技術においてコア粒子に低軟化点樹脂とともに着色剤やワックスを含有させると、シェル層の存在によって着色剤やワックスはトナー粒子表面に露出しないため、フィルミングなどの画像ノイズを有効に防止できる。しかしながら、この技術ではシェル層の存在によってコアが溶け難くなるために、十分な低温定着性が得られなかった。またトナー粒子表面へのワックスの染み出しに時間がかかり過ぎるため、高温オフセットを十分に防止できなかった。そのため低温オフセットおよび高温オフセットの発生しない定着温度範囲（非オフセット温度幅）が狭くなる問題があった。さらにコアシェル構造型トナー粒子は、水系媒体中でコア粒子の表面にシェル用樹脂粒子を付着／融着させて得るのが一般的であるが、トナー粒子は表面が高軟化点のシェル用樹脂粒子で構成されるために、トナー粒子の融着及びトナー粒子全体の円形度を上げるのが困難であった。

【0005】

コアシェル構造型トナー粒子の低温定着性を向上させるために、シェル層に2～15重

量%の結晶性樹脂を含有させる技術が報告されている（特許文献3）。しかしながら、耐熱保管性とのバランスを考えると、この構成では十分な低温定着性は発揮できなかった。

【0006】

一方、感光体上の潜像を現像するに際して、トナー粒子をスリーブやローラ等の現像部材と規制部材との間隙を通過させることによって摩擦・帯電させる1成分現像方式では、トナー粒子に機械的なストレスに対する耐破砕性が要求される。しかしながら、上記のようなコアシェル構造型トナー粒子ではシェル層が剥がれ易く、耐破砕性に問題があった。トナー粒子の耐破砕性が低いと、現像時にトナー粒子が破砕され、帯電量分布が広がることによる実機内の汚染や規制ブレードへの固着が発生しての縦スジの原因になる。

【特許文献1】特開2002-229251号公報

【特許文献2】特開2002-229248号公報

【特許文献3】特開2002-341586号公報

【特許文献4】特開2002-341584号公報

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0007】

本発明は上記事情に鑑みなされたものであり、すなわち低温定着性および耐熱保管性に十分に優れ、しかも定着画像を折ったときに画像の剥離（表面剥離）が生じない顕著に優れた定着強度を発揮する静電荷像現像用トナーを提供することを目的とする。

【0008】

本発明はまた、低温定着性および耐熱保管性だけでなく、耐破砕性、耐フィルミング性および画像保管性にも十分に優れ、低温オフセットおよび高温オフセットの発生しない定着温度範囲（非オフセット温度幅）が比較的広い静電荷像現像用トナーを提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【0009】

本発明は、コア粒子表面にシェル層を有してなるコアシェル構造型トナー粒子を含有する静電荷像現像用トナーであって、コア粒子が極性基を有するワックスおよび着色剤からなり、シェル層が軟化点60～120℃の結晶性ポリエステル樹脂をシェル層構成樹脂全体の70～100重量%含有することを特徴とする静電荷像現像用トナーに関する。

【発明の効果】

【0010】

本発明のトナーは低温定着性および耐熱保管性のいずれの特性も十分に優れており、しかも定着画像を折ったときに画像の剥離（表面剥離）が生じない顕著に優れた定着強度を発揮する。また比較的広い非オフセット温度幅を有する。さらに本発明のトナーは1成分現像方式に適用された場合でも耐破砕性に優れており、また耐フィルミング性および画像保管性にも優れている。

【発明を実施するための最良の形態】

【0011】

本明細書中、樹脂の「結晶性」とは、当該樹脂の軟化点と融点との比率（軟化点／融点）が0.9以上1.1以下であることを意味する。本発明において当該比率は樹脂のモノマー組成に依存するものであり、樹脂合成時の冷却速度等の条件にはほとんど依存しない。比率が上記範囲外の樹脂を「非晶性」と定義する。

【0012】

本発明において軟化点、融点およびガラス転移点はそれぞれ以下に示す方法によって測定された値を用いている。しかしながら、以下の方法によって測定されなければならないというわけではなく、以下の方法と同様の原理・原則に従う方法であれば、いかなる方法によって測定されてもよい。

【0013】

（軟化点）フローテスター（CFT-500：島津製作所社製）を用い、1.0gの試

料を、ダイ h 1.0 mm × ϕ 1.0 mm、昇温速度 3.0 °C/分、予熱時間 180 秒、荷重 30 kg、測定温度範囲 60 ~ 180 °C の条件で測定に供し、上記の試料が 1/2 流出したときの温度を軟化点とする。

【0014】

(融点) 示差走査熱量計 (セイコー電子工業社製、DSC 210) を用いて 200 °C まで昇温し、その温度から降温速度 10 °C/分で 0 °C まで冷却したサンプルを昇温速度 10 °C/分で測定し、融解熱の最大ピーク温度を求める。

(ガラス転移点) 上記融点の測定で最大ピーク温度以下のベースラインの延長線とピークの立ち上がり部分から、ピークの頂点まで、最大傾斜を示す接線との交点の温度を求める。

【0015】

本発明の静電荷像現像用トナーは、コア粒子表面にシェル層を有してなるコアシェル構造型トナー粒子を含有するものである。

【0016】

本発明においてコア粒子は特定のワックスおよび着色剤からなるものである。

コア粒子を構成するワックスは極性基を有するものであり、該ワックスを使用することによって後述のシェル層との結着 (接着) を良好に確保し、トナーの耐破砕性と耐フィルミング性との向上を達成するだけでなく、顕著に優れた定着強度を達成する。ワックスが極性基を有しないと、コア粒子とシェル層との結着が良好に維持できないために、トナーの耐破砕性と耐フィルミング性が低下する。または定着強度に関しては、媒体が露出するような画像の剥離は防止できるものの、表面剥離が生じ、画質が低下する。

【0017】

本発明での極性基とは、ヘテロ元素を持つ置換基のことである。そのような極性基の具体例として、例えば、エステル結合含有基、OH 基、アミノ基、アミド基、スルホン基などが挙げられる。

【0018】

極性基を有するワックスはコア粒子の形成容易性の観点から水中で分散可能なものが好適であり、そのような好適なワックスとして、下記一般式 (1) で示されるエステル化合物 (以下、「エステル化合物」という。) からなるものを挙げることができる。

一般式 (1) : $R^1 - (OCO - R^2)_n$

(式中、 R^1 および R^2 はそれぞれ独立して、置換基を有していてもよい炭素数 1 ~ 40 の炭化水素基を示し、 n は 1 ~ 4 の整数である。)

【0019】

エステル化合物を示す一般式 (1) において、 R^1 および R^2 は、それぞれ、置換基を有していてもよい炭化水素基を示す。炭化水素基 R^1 の炭素数は 1 ~ 40 とされ、好ましくは 1 ~ 20、更に好ましくは 2 ~ 5 とされる。炭化水素基 R^2 の炭素数は 1 ~ 40 とされ、好ましくは 16 ~ 30、更に好ましくは 18 ~ 26 とされる。また、一般式 (1) において、 n は 1 ~ 4 の整数とされ、好ましくは 2 ~ 4、さらに好ましくは 3 ~ 4、特に好ましくは 4 とされる。

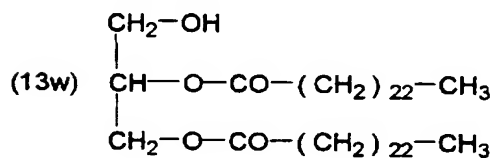
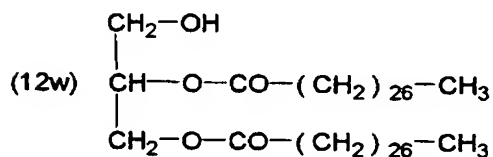
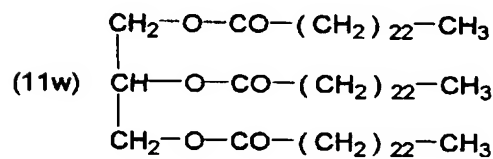
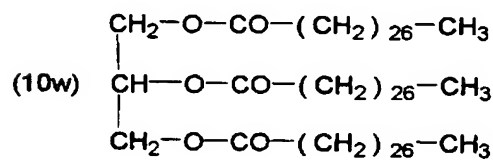
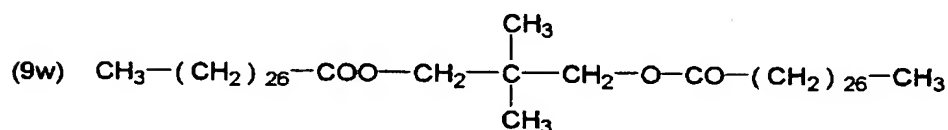
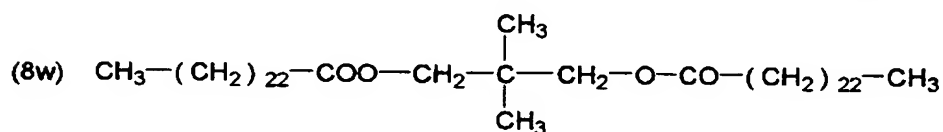
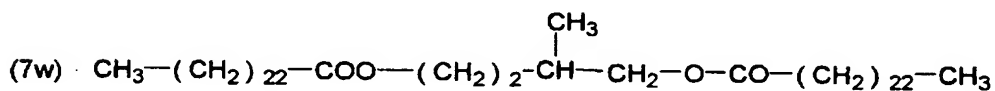
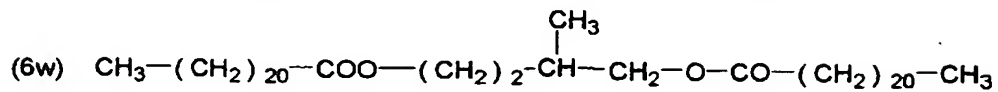
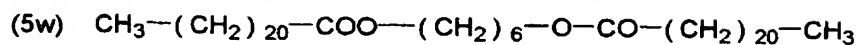
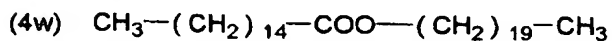
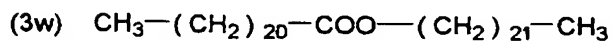
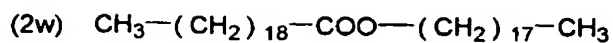
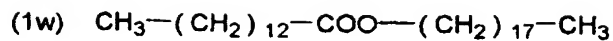
エステル化合物は、アルコールとカルボン酸との脱水縮合反応により好適に合成することができる。

【0020】

エステル化合物の具体例としては、下記式 (1w) ~ (22w) に示す化合物を例示することができる。

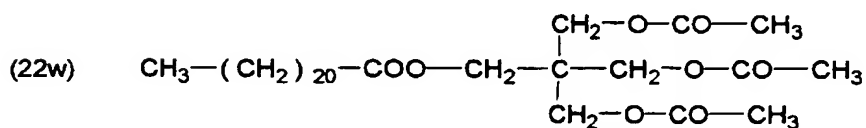
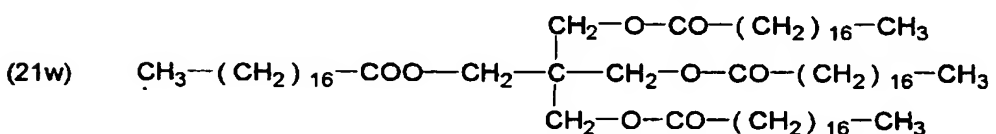
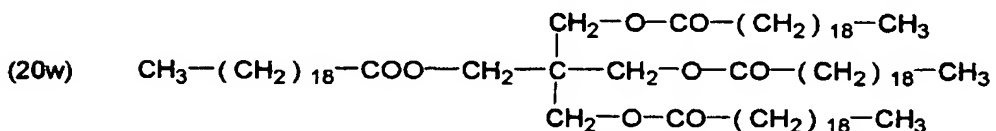
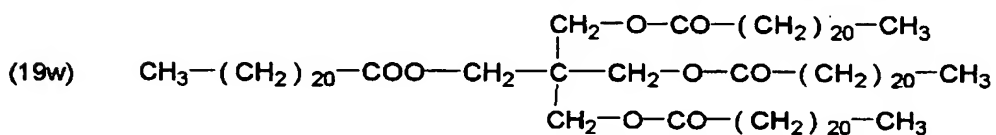
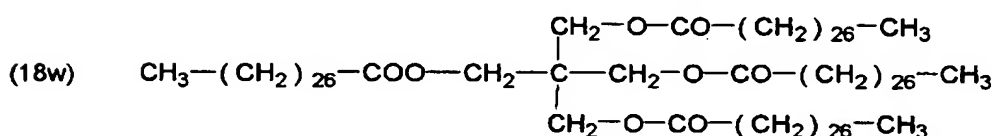
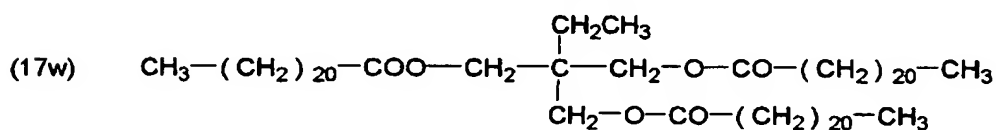
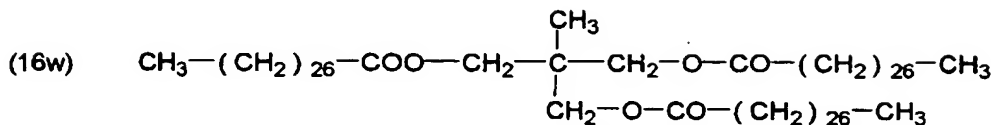
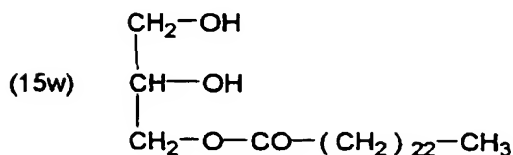
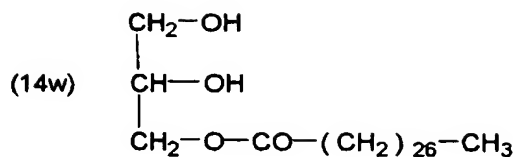
【0021】

【化 1】



【 0 0 2 2 】

【化2】



【0023】

極性基を有するワックスの中で定着性を改善するためにより好ましいのは、軟化点が50～120℃のワックスであり、特に好ましいのは60～110℃の範囲である。極性基を有するワックスは2種類以上組み合わせられて使用されてよく、その場合全てのワックスの軟化点が上記範囲内であることが好ましい。

【0024】

本発明において極性基を有するワックスは、後述のシェル層を構成する結晶性ポリエステル樹脂より軟化点が低いワックスを少なくとも1種類含むことが好ましい。これによって、定着時におけるトナー粒子表面へのワックスの染み出しがより円滑に達成され、非オフセット幅を有効に広げることができる。そのようなワックスの軟化点は好ましくは50

～120℃、特に60～110℃である。シェル層が2種類以上の結晶性ポリエステル樹脂を含有する場合は、最も軟化点の高い結晶性ポリエステル樹脂より軟化点が高いワックスを少なくとも1種類含めばよい。

【0025】

コア粒子は、非オフセット幅をさらに広げる目的で、極性基を有するワックス以外に、極性基を有しない他のワックス（以下、「他のワックス」という）を含有することが好ましい。そのような他のワックスの具体例として、低分子量ポリエチレン、低分子量ポリプロピレン等のオレフィン系ワックス等が挙げられる。

【0026】

他のワックスの軟化点は特に制限されるものではないが、下限は画像保存性の、上限は定着強度、染み出しやすさの観点から、70～130℃、特に80～120℃が好ましい。

【0027】

他のワックスのコア粒子含有量は極性基を有するワックスに対して60重量%以下、特に30～55重量%が好適である。他のワックス含有量が多過ぎると、トナーの耐破碎性と耐フィルミング性が低下し、また優れた定着強度が得られない。

【0028】

本発明において上記ワックスは、得られるトナー粒子中のワックス含有量（極性基を有するワックスと他のワックスとの合計含有量）がトナー粒子に対して3～50重量%、特に5～40重量%となるように使用される。

【0029】

コア粒子を構成する着色剤としては、各種の無機顔料、有機顔料および染料を挙げることができる。無機顔料としては、従来公知のものを用いることができる。どのような顔料でも使用することができるが、好適な無機顔料を以下に例示する。黒色の顔料としては、例えば、ファーンズブラック、チャンネルブラック、アセチレンブラック、サーマルブラック、ランプブラック等のカーボンブラック、更にマグネタイト、フェライト等の磁性粉も用いられる。これらの無機顔料は所望に応じて、単独または複数を選択併用することが可能である。

【0030】

有機顔料としては、従来公知のものを用いることができる。どのような顔料でも使用することができるが、具体的な有機顔料を以下に例示する。

マゼンタまたはレッド用の顔料としては、C. I. ピグメントレッド2、C. I. ピグメントレッド3、C. I. ピグメントレッド5、C. I. ピグメントレッド6、C. I. ピグメントレッド7、C. I. ピグメントレッド15、C. I. ピグメントレッド16、C. I. ピグメントレッド48:1、C. I. ピグメントレッド53:1、C. I. ピグメントレッド57:1、C. I. ピグメントレッド81:3、C. I. ピグメントレッド122、C. I. ピグメントレッド123、C. I. ピグメントレッド139、C. I. ピグメントレッド144、C. I. ピグメントレッド149、C. I. ピグメントレッド166、C. I. ピグメントレッド177、C. I. ピグメントレッド178、C. I. ピグメントレッド184、C. I. ピグメントレッド185、C. I. ピグメントレッド222、C. I. ピグメントレッド238等が挙げられる。

【0031】

オレンジまたはイエロー用の顔料としては、C. I. ピグメントオレンジ31、C. I. ピグメントオレンジ43、C. I. ピグメントイエロー12、C. I. ピグメントイエロー13、C. I. ピグメントイエロー14、C. I. ピグメントイエロー15、C. I. ピグメントイエロー17、C. I. ピグメントイエロー74、C. I. ピグメントイエロー93、C. I. ピグメントイエロー94、C. I. ピグメントイエロー97、C. I. ピグメントイエロー138、C. I. ピグメントイエロー180等が挙げられる。

グリーンまたはシアン用の顔料としては、C. I. ピグメントブルー15、C. I. ピグメントブルー15:2、C. I. ピグメントブルー15:3、C. I. ピグメントブルー

ー16、C. I. ピグメントブルー60、C. I. ピグメントグリーン7等が挙げられる。

【0032】

染料としてはC. I. ソルベントレッド1、同49、同52、同58、同63、同111、同122、C. I. ソルベントイエロー19、同44、同77、同79、同81、同82、同93、同98、同103、同104、同112、同162、C. I. ソルベントブルー25、同36、同60、同70、同93、同95等を用いることができ、またこれらの混合物も用いることができる。

これらの有機顔料および染料は所望に応じて、単独または複数を選択併用することが可能である。

【0033】

着色剤のコア粒子中での含有量は所望の画像濃度が得られる限り、特に制限されず、トナー全重量に対して（またはトナー粒子中）3～15重量%、特に5～10重量%が好適である。

【0034】

コア粒子は上記材料からなる限りいかなる方法によって製造されてよく、例えば、少なくとも極性基を有するワックス粒子および着色剤粒子を水系媒体中で凝集／融着させることによって製造可能である。コア粒子の体積平均粒径は通常、2.0～6.0 μ mである。水系媒体中には、荷電制御剤粒子などの他のトナー構成材料が添加され、ワックス粒子などとともに凝集／融着されてもよい。荷電制御剤粒子はコア粒子に含有されることに限定されるものではなく、後のシェル層形成工程で添加されてシェル層に含有されてもよい。

【0035】

本明細書中、「凝集」は、複数のワックス粒子および着色剤粒子が単に付着することを意図する概念で用いるものとする。「凝集」によって、構成粒子は接触しているものの、ワックス粒子等の溶融による結合は形成されていない、いわゆるヘテロ凝集粒子（群）が形成される。そのような「凝集」によって形成される粒子群を「凝集粒子」と呼ぶものとする。

「融着」は、凝集粒子における個々の構成粒子の界面の少なくとも一部においてワックス粒子等の溶融による結合が形成され、使用、取り扱い単位としての一つの粒子となることを意図する概念で用いるものとする。そのような「融着」がなされた粒子群を「融着粒子」と呼ぶものとする。

「凝集／融着」とは、凝集と融着とが同時あるいは段階的に起こること、または、凝集と融着とを同時あるいは段階的に起こさせる行為をいう。

【0036】

詳しくは、コア粒子は、少なくとも極性基を有するワックス粒子分散液および着色剤粒子分散液を混合し、これらの粒子を水系媒体中で塩析により凝集／融着させることによって製造可能である。

【0037】

塩析は例えばコロイドに関する文献・書籍や高分子刊行会発行、室井宗一著「高分子ラテックスの化学」第6章以降に詳細に記載されており、溶媒中の分散粒子の電気2重層を圧縮させて粒子を凝集させるための手段である。本発明で塩析を起こすために用いられる凝集剤としては、ワックス粒子の極性官能基の極性、ワックス粒子分散液やワックス粒子とともに凝集される着色剤粒子などの分散液に用いられる界面活性剤と逆極性の界面活性剤の他、2価以上の無機金属塩を好適に用いることができる。一般的に、価数が高いほど凝集力は増大するため、粒子の凝集スピードや製造プロセスの安定性を考慮して凝集剤は選択される。凝集剤の具体例としては、例えば、塩化カルシウム、硝酸カルシウム、塩化バリウム、塩化マグネシウム、塩化亜鉛、塩化アルミニウム、硫酸アルミニウムなどの金属塩、及び、ポリ塩化アルミニウム、ポリ水酸化アルミニウム、多硫化カルシウム等の無機金属塩重合体などが挙げられる。

【0038】

凝集剤を添加するに当って、一般的には系内での急激な凝集を抑制する観点から分散系の温度は40℃以下に保つことが好ましい。温度が40℃を越える条件で凝集剤を添加すると急速な凝集が起こり、粒径制御が困難となったり、得られた粒子のかさ密度が低く問題となる場合がある。更にその後、通常は、加熱して凝集と融着を同時進行させて融着粒子を生成させる。攪拌は通常の公知の攪拌装置、例えばパドル翼、イカリ翼、三枚後退翼、マックスブレンド翼、ダブルヘリカル等を有する反応槽で行っても良いし、ホモジナイザー、ホモミキサー、ヘンシェルミキサー、等を用いることもできる。攪拌の回転数は、系が乱流状態となるように設定されることが好ましい。

【0039】

凝集（塩析反応）による粒径成長は、分散液のpHと温度を調節することにより、比較的容易に制御することが可能である。pHの値は反応系のゼータ電位や等電点、また使用する凝集剤の種類・量、乳化剤の種類・量、目標とするトナーの粒径によって変わるため一義的には定義できないが、例えばアルミニウム系凝集剤を用いる場合、塩析作用を効果的に発現させるpHは2～6であり、マグネシウム系凝集剤の場合はpH7～12とされる。

【0040】

反応温度についてもpHと同様、一義的に定義することはできないが、40～95℃の範囲で粒径成長が制御できる条件であることが好ましい。この範囲よりも高い温度では、凝集と融着の同時進行により形状がほぼ真球状となりやすく形状制御性に欠ける為好ましくない。反応は、所定の温度で少なくとも10分以上保持し、より好ましくは20分以上保持することにより所望の粒径のコア粒子とする。反応温度がコアWAXの軟化点よりも低ければ粒子は凝集するだけで融着は進まず、該軟化点よりも高ければ粒子の凝集と融着は同時進行する。融着が進まない場合、融着は、凝集の後であってシェル層の形成前に、またはシェル層の形成時に昇温させることにより行うことができる。

【0041】

コア粒子の形成工程では、所定の温度までは一定速度で昇温してもよいし、段階的に昇温しても良い。系の攪拌翼の回転数を適宜調節してもよい。

粒子の凝集速度や粒径制御については所望の粒径に到達するまで系内の粒子の凝集状態を顕微鏡や粒径測定器などでモニターしながら、反応温度や攪拌回転数を操作することで行う。そして所望の粒径に到達したときに、シェル層の形成工程に連続的に進行してもよいし、系の粒径成長を停止あるいは成長速度を遅くするために凝集力を低下させる操作を行ってもよい。

【0042】

系の凝集力を低下させる手段としては、粒子の安定性を増加させる手段や凝集剤の凝集作用を低下させる手段を用いることができる。例えば粒子の安定性を増加させる手段としては系のpHを安定側に調整する（例えば酸性下で凝集させる場合は中性からアルカリ性側に、アルカリ性下で凝集させる場合は中性から酸性側に調整する）方法や上述の水系媒体の界面活性剤を添加するなどの方法が用いられる。また凝集剤の凝集作用を低下させる手段としては価数の異なる金属カチオンを加え、拮抗作用により凝集力を著しく低下させることができる。凝集力を低下させた後に昇温し、融着を促進したり形状を球形側に制御することが可能である。

【0043】

ワックス粒子分散液はワックスを界面活性剤の存在下で水中に分散させてなる分散体である。ワックス分散体は1μm以下の分散粒径を有することが好ましく、より好ましくは100～500nmの範囲である。

着色剤粒子分散液は着色剤を界面活性剤の存在下で水中に分散させてなる分散体である。着色剤分散体は分散粒径が1μm以下のものを用いるのが好ましく、より好ましくは100～500nmの範囲である。

【0044】

界面活性剤としては、カチオン系界面活性剤、アニオン系界面活性剤、ノニオン系界面活性剤の中から選ばれる少なくとも一種を用いる。これらの界面活性剤は二種以上を併用してもよい。この中で特にアニオン系界面活性剤を主として用いることが好ましい。

カチオン系界面活性剤の具体例としては、ドデシルアンモニウムクロライド、ドデシルアンモニウムブロマイド、ドデシルトリメチルアンモニウムブロマイド、ドデシルピリジニウムクロライド、ドデシルピリジニウムブロマイド、ヘキサデシルトリメチルアンモニウムブロマイド等が挙げられる。

アニオン系界面活性剤の具体例としては、スルホン酸塩（ドデシルベンゼンスルホン酸ナトリウム、アリアルアルキルポリエーテルスルホン酸ナトリウム）、硫酸エステル塩（ドデシル硫酸ナトリウム、テトラデシル硫酸ナトリウム、ペンタデシル硫酸ナトリウム、オクチル硫酸ナトリウムなど）、脂肪酸塩（オレイン酸ナトリウム、ラウリン酸ナトリウム、カプリン酸ナトリウム、カプリル酸ナトリウム、カブロン酸ナトリウム、ステアリン酸カリウム、オレイン酸カルシウムなど）などのイオン性界面活性剤を好適なものとして例示することができる。また、ポリエチレンオキサイド、ポリプロピレンオキサイド、ポリプロピレンオキサイドとポリエチレンオキサイドの組み合わせ、ポリエチレングリコールと高級脂肪酸とのエステル、アルキルフェノールポリエチレンオキサイド、高級脂肪酸とポリエチレングリコールとのエステル、高級脂肪酸とポリプロピレンオキサイドとのエステル、ソルビタンエステルなどのノニオン性界面活性剤も使用することができる。

これらの界面活性剤は水系媒体中に含有されてもよく、また他の工程または使用目的で使用されてもよい。

【0045】

コア粒子に含有されてもよい荷電制御剤としては、公知の任意のものを単独ないしは併用して用いることができる。カラートナー適応性（荷電制御剤自体が無色ないしは淡色でトナーへの色調障害がないこと）を勘案すると、正荷電性としては四級アンモニウム塩化合物が、負荷電性としてはサリチル酸もしくはアルキルサリチル酸のクロム、亜鉛、アルミニウム等との金属塩、金属錯体や、ベンジル酸の金属塩、金属錯体、アミド化合物、フェノール化合物、ナフトール化合物、フェノールアミド化合物等が好ましい。これらの荷電制御剤は界面活性剤等を用いて分散体とし、上記のワックスや着色剤とともに使用することができる。

【0046】

本発明においてコア粒子表面に形成されるシェル層は軟化点60～120℃、好ましくは60～110℃の結晶性ポリエステル樹脂をシェル層構成樹脂全体の70～100重量%、好ましくは70～95重量%含有する。本発明においてはシェル層に特定軟化点の結晶性ポリエステル樹脂を特定量含有させることにより、低温定着性と耐熱保管性との両立を比較的高レベルで達成する。すなわち、結晶性ポリエステル樹脂の分子運動が始まる温度は軟化点以上の温度であり、ガラス転移点以上の温度で分子運動が始まる非晶性樹脂より高いので、そのような結晶性ポリエステル樹脂をシェル層に含有させることによって優れた耐熱保管性を確保できる。また結晶性ポリエステル樹脂は軟化点以上の温度で分子運動が始まった後、比較的速やかに溶解し、粘度が迅速に低減される。そのため、ガラス転移点以上の温度で分子運動が始まった後、徐々に粘度が低減される非晶性樹脂と比較して、結晶性ポリエステル樹脂は低温で、かつ速やかに溶解するので、そのような樹脂をシェル層に含有させることにより、低温定着性が有効に向上する。それらの結果として、本発明のトナーは低温定着性と耐熱保管性との両立を比較的高レベルで達成できる。特に、画像上に媒体が露出するような剥離や表面剥離のない優れた定着強度を達成する。これは、シェル層が上述のように粘度が迅速に低減される特定の結晶性ポリエステル樹脂を特定量以上含有すること、およびコア粒子が上述のようにワックスを主成分とすることに起因ものと考えられる。

【0047】

結晶性ポリエステル樹脂の軟化点が高すぎると、シェル層が速やかに溶解できないので、低温での定着を行えず、またオフセットが発生し易くなる。一方、軟化点が低すぎると

、耐熱保管性、画像保管性、耐破碎性、耐フィルミング性が悪化する。またトナーの熔融過多が起きるので、高温オフセットが発生しやすくなり、結果として非オフセット温度幅が狭くなる。

結晶性ポリエステル樹脂の含有量が少な過ぎると、低温定着性と耐熱保管性の両立を達成することが困難になり、たとえ達成できたとしてもシェル層が速やかに熔融しないために高温オフセットが発生し易くなって非オフセット温度幅が狭くなる。

【0048】

本発明において結晶性ポリエステル樹脂は前記のような「結晶性」を有する限り、いかなる多価アルコール成分や多価カルボン酸からなっていてよいが、通常は、2価アルコール成分と2価カルボン酸成分とを縮重合させてなるポリエステル樹脂であって、それらの成分のうち少なくとも一方の成分として直鎖状化合物を用いたものを使用する。すなわち少なくとも直鎖状2価アルコール化合物または／および直鎖状2価カルボン酸化合物を構成成分として含有する結晶性ポリエステル樹脂を使用する。

【0049】

直鎖状化合物（すなわち直鎖状2価アルコール化合物および直鎖状2価カルボン酸化合物）は芳香環、ヒドロ芳香環および不飽和結合を有さない直鎖状脂肪族化合物であり、置換基として炭素数1～2のアルキル基を有しても良い。

【0050】

結晶性ポリエステルを構成する2価アルコール成分のうち直鎖状2価アルコール化合物の具体例として、例えば、エチレングリコール、ジエチレングリコール、トリエチレングリコール、1,2-プロピレングリコール、1,3-プロピレングリコール、1,4-ブタンジオール、ネオペンチルグリコール、1,5-ペンタングリコール、1,6-ヘキサングリコール、1,6-ヘキサンジオール、1,10-デカンジオール、ポリエチレングリコール、ポリプロピレングリコール、ポリテトラメチレングリコール等が挙げられる。

【0051】

2価アルコール成分のうち上記直鎖状2価アルコール化合物以外の非直鎖状2価アルコール化合物の具体例として、例えば、1,4-ブテンジオール、1,4-シクロヘキサンジオレングリコール、1,4-シクロヘキサジメタノール、ビスフェノールA、ビスフェノールZ、水素添加ビスフェノールA等が挙げられる。

【0052】

2価カルボン酸成分のうち直鎖状2価カルボン酸化合物の具体例として、例えば、シュウ酸、マロン酸、コハク酸、グルタル酸、アジピン酸、ピメリン酸、スベリン酸、アゼライン酸、セバシン酸ならびにこれらの酸無水物、酸塩化物および低級アルキル（炭素数1～3）エステル等が挙げられる。

【0053】

2価カルボン酸成分のうち上記直鎖状2価カルボン酸化合物以外の非直鎖状2価カルボン酸化合物の具体例として、例えば、マレイン酸、フマル酸、シトラコン酸、イタコン酸、グルタコン酸、テレフタル酸、イソフタル酸、フタル酸ならびにこれらの酸無水物、酸塩化物および低級アルキル（炭素数1～3）エステル等が挙げられる。

【0054】

結晶性ポリエステル樹脂を構成するカルボン酸成分として、上記2価カルボン酸成分以外に、n-ドデシルコハク酸、n-ドデセニルコハク酸、イソドデシルコハク酸、イソドデセニルコハク酸、n-オクチルコハク酸、n-オクテニルコハク酸ならびにこれらの酸無水物、酸塩化物および低級アルキル（炭素数1～3）エステルを使用してもよい。

【0055】

結晶性ポリエステル樹脂を構成する上記のようなアルコール成分およびカルボン酸成分の合計量に占める直鎖状化合物の割合は通常、20～100重量%であり、好ましくは30～100重量%、より好ましくは40～100重量%である。直鎖状化合物は2種類以上組み合わせ使用してもよく、例えば、1種類以上の直鎖状2価アルコール化合物と1種類以上の直鎖状2価カルボン酸化合物を併用してもよい。その場合には直鎖状化合物の

合計量が上記範囲内であればよい。

【0056】

結晶性ポリエステル樹脂としては組成の異なる2種類以上の結晶性ポリエステル樹脂が使用されてもよい。2種類以上の結晶性ポリエステル樹脂を使用する場合には、いずれの樹脂の軟化点も前記範囲内であるようなものを使用することが好ましい。

【0057】

結晶性ポリエステル樹脂は所定のアルコール成分とカルボン酸成分とを必要に応じて減圧雰囲気下および／または触媒の存在下で加熱によって縮重合反応させることにより製造可能である。

【0058】

シェル層は結晶性ポリエステル樹脂以外の他の樹脂を含有しても良い。他の樹脂としては特に制限されないが、コア層との接着性および強靱性の観点から、非晶性ポリエステル樹脂が好適である。

【0059】

非晶性ポリエステル樹脂は、例えば、以下に示す多価アルコール成分と多価カルボン酸成分とを必要に応じて減圧雰囲気下および／または触媒の存在下で加熱によって縮重合反応させることにより製造可能である。

【0060】

多価アルコール成分としては、具体的には、ポリオキシプロピレン(2, 2)-2, 2-ビス(4-ヒドロキシフェニル)プロパン、ポリオキシプロピレン(3, 3)-2, 2-ビス(4-ヒドロキシフェニル)プロパン、ポリオキシエチレン(2, 0)-2, 2-ビス(4-ヒドロキシフェニル)プロパン、ポリオキシプロピレン(2, 0)-ポリオキシエチレン(2, 0)-2, 2-ビス(4-ヒドロキシフェニル)プロパン、ポリオキシプロピレン(2, 0)-ポリオキシエチレン(2, 0)-2, 2-ビス(4-ヒドロキシフェニル)プロパン等のジオール、エチレングリコール、ジエチレングリコール、トリエチレングリコール、ポリエチレングリコール、プロピレングリコール、ジプロピレングリコール、イソペンチルグリコール、水添ビスフェノールA、1, 3-ブタンジオール、1, 4-ブタンジオール、ネオペンチルグリコール、キシリレングリコール、1, 4-シクロヘキサジメタノール、グリセリン、トリメチロールエタン、トリメチロールプロパン、ペンタエリスリトール、ビス- β -ヒドロキシエチル)テレフタレート、トリス- β -ヒドロキシエチル)イソシアヌレート、2, 2, 4-トリメチロールペンタン-1, 3-ジオール等が用いられる。さらに、ヒドロキシカルボン酸成分として、例えば、p-オキシ安息香酸、バニリン酸、ジメチロールプロピオン酸、リンゴ酸、酒石酸、5-ヒドロキシイソフタル酸等を添加することができる。

【0061】

多価カルボン酸成分としては、具体的には、マロン酸、コハク酸、グルタル酸、ダイマー酸、フタル酸、イソフタル酸、テレフタル酸、イソフタル酸ジメチルエステル、テレフタル酸ジメチルエステル、テレフタル酸モノメチルエステル、テトラヒドロテレフタル酸、メチルテトラヒドロフタル酸、ヘキサヒドロフタル酸、ジメチルテトラヒドロフタル酸、エンドメチレンヘキサヒドロフタル酸、フマル酸、ナフタレンテトラカルボン酸、ジフェノール酸、トリメリット酸、ピロメリット酸、トリメシン酸、シクロペンタンジカルボン酸、3, 3', 4, 4'-ベンゾフェノンテトラカルボン酸、1, 2, 3, 4-ブタンテトラカルボン酸、2, 2-ビス- β -カルボキシフェニル)プロパン、トリメリット酸無水物と4, 4'-ジアミノフェニルメタンから得られるジイミドカルボン酸、トリス- β -カルボキシエチル)イソシアヌレート、イソシアヌレート環含有ポリイミドカルボン酸、トリレンジイソシアネート、キシリレンジイソシアネート又はイソホロンジイソシアネートの三量化反応物とトリメリット酸無水物から得られるイソシアネート環含有ポリイミドカルボン酸、ならびにこれらの酸無水物、酸塩化物および低級アルキル(炭素数1~3)エステル等が挙げられ、これらは単独で又は2種以上を混合して用いられる。

【0062】

非晶性ポリエステル樹脂としては組成の異なる2種類以上の非晶性ポリエステル樹脂が使用されてもよい。

【0063】

非晶性ポリエステル樹脂の軟化点は低温定着性の観点から、特に制限されず、通常80～130℃、特に95～120℃が好適である。2種類以上の非晶性ポリエステル樹脂を使用する場合には、いずれの樹脂の軟化点も上記範囲内であるようなものを使用することが好ましい。

【0064】

シェル層は、水系媒体中、コア粒子表面に結晶性ポリエステル樹脂粒子および所望により他の樹脂粒子（以下、単にシェル粒子ということがある）を付着／融着させてコア粒子を粒子成長させることにより形成可能である。「付着／融着」とは、付着と融着とが同時あるいは段階的に起こること、または、付着と融着とを同時あるいは段階的に起こさせる行為をいう。

【0065】

結晶性ポリエステル樹脂粒子は溶融懸濁法によって得ることができる。詳しくは、水系媒体中、結晶性ポリエステル樹脂を必要に応じて加圧下で加熱によって溶融させた後、攪拌によって高速剪断下で造粒し、室温まで冷却することによって樹脂粒子を得る。水系媒体中には分散安定化のために界面活性剤が適宜添加されていてもよい。

【0066】

他の樹脂粒子、特に非晶性ポリエステル樹脂粒子は上記のような溶融懸濁法によって得ても良いし、または以下に示す溶解懸濁法によって得ても良い。詳しくは、まず所望の非晶性ポリエステル樹脂を有機溶媒に溶解し、得られた溶液を水系媒体中、ホモジナイザー等の混合攪拌装置によって高速剪断下で攪拌しながら造粒し、加熱することによって有機溶媒を除去して樹脂粒子を得る。有機溶媒はポリエステル樹脂を溶解可能で、かつ水に不溶なものが使用され、ポリエステルの構成成分にもよるが、通常、トルエン、キシレン、ヘキサン等の炭化水素類、塩化メチレン、クロロフォルム、ジクロロエタン等のハロゲン化炭化水素類、エタノール、ブタノール、ベンジルアルコールエーテル、テトラヒドロフラン等のアルコール類、エーテル、酢酸メチル、酢酸エチル、酢酸ブチル、酢酸イソプロピル等のエステル類、アセトン、メチルエチルケトン、ジイソブチルケトン、シクロヘキサノン、メチルシクロヘキサノン等のケトン類が挙げられる。樹脂と有機溶媒との重量比は特に制限されないが、樹脂粒子の形成容易性及びその後の凝集による樹脂粒子の収率向上等から10/90～80/20の範囲であり、好ましくは30/70～70/30の範囲であり、特に好ましくは40/60～60/40の範囲である。水系媒体中には分散安定化のために公知の界面活性剤が適宜添加されてもよい。また、有機溶媒の除去は減圧下で行ってもよい。

【0067】

結晶性ポリエステル樹脂粒子および他の樹脂粒子はいずれも重量平均粒径30～300nmを有することが好ましい。

【0068】

コア粒子表面にシェル粒子を付着／融着させるためには、コア粒子を得るための凝集／融着工程に連続して、このシェル層形成工程を実施することが好ましい。すなわち、ワックス粒子等の凝集／融着によって得られたコア粒子の分散液にシェル粒子の分散液を添加する。このとき、シェル粒子の付着／融着によってコア粒子を粒子成長させるために、凝集／融着工程で所望の粒径に到達させたときの反応温度またはそれ以上の温度に設定することが好ましい。

【0069】

コア粒子に対するシェル粒子の付着性（即ち凝集性）を制御する手段としては凝集／融着工程で挙げた手段（反応温度や系のpH、攪拌回転数、活性剤などの調整）を用いることができる。上記手段により、シェル粒子同士の凝集を避けコアにシェル粒子が付着していくような緩やかな条件に設定することが望ましい。また、上記の手段でシェル粒子がコ

ア粒子に付着しない場合は、凝集／融着工程で用いた凝集剤を適宜追加添加することにより凝集力を増加させて付着させてもよい。

【0070】

シェル層の形成は多段階、例えば、2～6段階、特に3～5段階で行われてもよい。すなわちコア粒子の分散液にシェル粒子の分散液を添加し、コア粒子表面にシェル粒子を付着／融着させてシェル層を形成した後、さらに系内にシェル粒子を添加し、シェル粒子を付着／融着させてシェル層を形成する操作を繰り返す。

【0071】

シェル層を多段階で形成する場合、全ての段階においてシェル粒子（結晶性ポリエステル樹脂および他の樹脂の組成および軟化点、ならびにそれらの配合比率）は通常、同じものが使用されるが、前記した範囲内で異なるものが使用されてもよい。

【0072】

シェル粒子がコア粒子に付着する様子や融着する様子は、反応途中のサンプリングにより電子顕微鏡で粒子表面を観察することで確認することができる。また、サンプリングした分散液を遠心分離機にかけて、上澄み液が白濁していないことを確認することで全てのシェル粒子が付着していることを確認することも可能である。最後のシェル層形成段階で系内で浮遊するシェル粒子が全てコア粒子に付着したのを確認した後は、通常、完全に系の凝集力を消失させて粒子成長を停止し、シェル層の被膜化・粒子の形状制御を行う（熟成処理段階）。粒子の形状については上述の形状測定装置FPIA-2000により随時モニターすることができる。

【0073】

コア粒子とシェル粒子との配合重量比（コア：シェル）は、トナー粒子中のワックス含有量が前記範囲内であるような量であり、通常は5：95～50：50、特に10：90～45：55である。シェル層が多段階で形成される場合、コア粒子と全シェル粒子との配合重量比が上記範囲内であればよい。

【0074】

以上のようにして得られるコア－シェル構造のトナー粒子の形状（好ましくは平均円形度＝0.930～0.995）は、コア粒子の形状（好ましくは平均円形度＝0.850～0.950）およびこの付着／融着工程の熟成処理段階における加熱条件を調整することで容易に制御することができる。

【0075】

得られたトナー粒子には、通常、洗浄処理、乾燥処理および外添処理がなされる。

特に外添処理工程では、乾燥処理されたトナー粒子に対して単独あるいは複数種の外添剤を添加・混合する。外添剤を添加・混合するために使用される装置としては、タービュラーミキサー、ヘンシェルミキサー、ナウターミキサー、ハイブリダイザー、V型混合機などの種々の公知の混合装置や表面改質装置を挙げることができる。この工程において複数種の外添剤を添加する場合は、1度に全ての添加剤を混合処理しても構わないし、分割して混合処理してもよい。

更に得られた粒子を目開きが30～200 μ m程度のフルイによって粗大粒子を除去することが望ましい。

【0076】

外添剤としては、シリカ、アルミナ、チタニア、チタン酸ストロンチウム、酸化セリウム等の各種無機酸化微粒子、必要に応じて疎水化処理した微粒子、ビニル系重合体、ステアリン酸亜鉛やステアリン酸カルシウムなどの金属石鹸等が使用できる。特にフルカラートナーにおいてはプロセスが複雑となるため、流動性、帯電性、転写性、クリーニング性をさらに向上させ得る機能性粒子を添加することが望ましい。外添剤の添加量は、トナー粒子に対して0.05～5重量部の範囲が好ましい。

【0077】

以上のような本発明のトナーは低温定着性および耐熱保管性が十分に優れており、定着温度を比較的低温、例えば125～135℃に設定されても、低温オフセットの発生しな

い良好な定着が可能である。

また本発明のトナーは上記のように比較的低温でも良好な定着が可能であり、しかもシェル層が速やかに熔融しコア粒子内のワックスの染み出しが迅速である。そのため、比較的広い非オフセット温度幅を有効に確保できる。

【0078】

また本発明のトナーは、スチレンアクリル系樹脂より一般的に強度が高いポリエステル樹脂をシェル層に含有させているので、1成分現像方式に適用された場合でも耐破砕性に優れている。

また本発明のトナーはコアシェル構造を有するため、耐フィルミング性および画像保管性にも優れている。

【0079】

本発明のトナーは、磁性または非磁性の一成分現像剤として使用することもできるが、キャリアと混合して二成分現像剤として使用してもよい。本発明のトナーを二成分現像剤として使用する場合において、キャリアとしては、鉄、フェライト、マグネタイト等の金属、それらの金属とアルミニウム、鉛等の金属との合金等の従来から公知の材料を用いることができる。

【実施例】

【0080】

以下、実施例を用いて本発明を詳しく説明するが、実施例によって本発明の範囲が制限されるものではない。特記しない限り、「部」は「重量部」を意味するものとする。

【0081】

(樹脂分散液の製造)

結晶性樹脂1:

アジピン酸800部、1, 4-シクロヘキサンジメタノール550部、ジブチルスズ2部をフラスコ内で混合し、減圧雰囲気下で240℃に加熱して6時間脱水縮合し樹脂を得た。軟化点は91℃であった。融点は87℃であった。得られた樹脂200部とイオン交換水784部、アニオン性界面活性剤(日本油脂社製:ニューレックスR)16部を95℃に加熱しながらホモジナイザー(IKAジャパン社製:ウルトラタラクス)で混合攪拌した後、室温まで冷却し、結晶性樹脂1分散液(平均粒径160nm)を得た。

【0082】

結晶性樹脂2:

フマル酸800部、1, 4-ブタンジオール300部、1, 6-ヘキサンジオール250部、ジブチルスズ2部をフラスコ内で混合し、減圧雰囲気下で240℃に加熱して6時間脱水縮合し樹脂を得た。軟化点は117℃であった。融点は116℃であった。得られた樹脂200部とイオン交換水784部をオートクレーブ中で加熱しながら、ホモジナイザー(IKAジャパン社製:ウルトラタラクス)で混合攪拌した後、アニオン性界面活性剤(日本油脂社製:ニューレックスR)16部を添加、室温まで冷却し、結晶性樹脂2分散液(平均粒径160nm)を得た。

【0083】

結晶性樹脂3:

セバシン酸ジメチル800部、エチレングリコール550部、ジブチルスズ2部をフラスコ内で混合し、減圧雰囲気下で240℃に加熱して6時間脱水縮合し樹脂を得た。軟化点は64℃であった。融点は61℃であった。得られた樹脂200部とイオン交換水784部、アニオン性界面活性剤(日本油脂社製:ニューレックスR)16部を80℃に加熱しながらホモジナイザー(IKAジャパン社製:ウルトラタラクス)で混合攪拌した後、室温まで冷却し、結晶性樹脂3分散液(平均粒径160nm)を得た。

【0084】

結晶性樹脂4:

セバシン酸ジメチル800部、エチレングリコール550部、ジブチルスズ2部をフラスコ内で混合し、減圧雰囲気下で240℃に加熱して6時間脱水縮合し樹脂を得た。軟化点

は51℃であった。融点は50℃であった。得られた樹脂200部とイオン交換水784部、アニオン性界面活性剤（日本油脂社製：ニューレックスR）16部を70℃に加熱しながらホモジナイザー（IKAジャパン社製：ウルトラタラクス）で混合攪拌した後、室温まで冷却し、結晶性樹脂4分散液（平均粒径160nm）を得た。

【0085】

結晶性樹脂5：

フマル酸800部、1,4-ブタンジオール400部、1,6-ヘキサジオール150部、ジブチルスズ2部をフラスコ内で混合し、減圧雰囲気下で240℃に加熱して6時間脱水縮合し樹脂を得た。軟化点は125℃であった。融点は123℃であった。得られた樹脂200部とイオン交換水784部をオートクレーブ中で加熱しながら、ホモジナイザー（IKAジャパン社製：ウルトラタラクス）で混合攪拌した後、アニオン性界面活性剤（日本油脂社製：ニューレックスR）16部を添加、室温まで冷却し、結晶性樹脂5分散液（平均粒径160nm）を得た。

【0086】

ポリエステル樹脂1（PES1）：

ポリオキシプロピレン（2,2）-2,2-ビス（4-ヒドロキシフェニル）プロパン（BPA-PO）400部、ポリオキシエチレン（2,0）-2,2-ビス（4-ヒドロキシフェニル）プロパン付加物（BPA-EO）600部、テレフタル酸1200部、フマル酸800部、ジブチルスズ4部をフラスコ内で混合し、減圧雰囲気下で220℃に加熱して8時間脱水縮合し非晶性ポリエステル樹脂を得た。軟化点は105℃であった。融点は64℃であった。得られた樹脂200部を室温でTHF300部に溶解し、この溶液を、ホモジナイザー（IKAジャパン社製：ウルトラタラクス）で混合攪拌したイオン交換水800部に加えて乳化させた。乳化液を70℃に加熱して余分なTHFを留去して、PES1分散液（平均粒径160nm）を得た。

【0087】

ポリエステル樹脂2（PES2）：

BPA-PO400部、BPA-EO600部、テレフタル酸1200部、フマル酸800部、ジブチルスズ4部をフラスコ内で混合し、減圧雰囲気下で220℃に加熱して8時間脱水縮合し非晶性ポリエステル樹脂を得た。軟化点は108℃であった。融点は64℃であった。得られた樹脂200部を室温でTHF300部に溶解し、この溶液を、ホモジナイザー（IKAジャパン社製：ウルトラタラクス）で混合攪拌したイオン交換水800部に加えて乳化させた。乳化液を70℃に加熱して余分なTHFを留去して、PES2分散液（平均粒径160nm）を得た。

【0088】

（離型剤分散液の製造）

離型剤分散液1（WEP-5RF）：

エレクトールWEP-5RF（日本油脂社製、軟化点82℃）200部、イオン交換水784部、アニオン性界面活性剤（日本油脂社製：ニューレックスR）16部をオートクレーブ中で溶解後、ホモジナイザーで分散させて離型剤分散液1（平均粒径200nm）を得た。

【0089】

離型剤分散液2（WE-2）：

エレクトールWE-2（日本油脂社製、軟化点60℃）200部、イオン交換水784部、アニオン性界面活性剤（日本油脂社製：ニューレックスR）16部をオートクレーブ中で溶解後、ホモジナイザーで分散させて離型剤分散液2（平均粒径200nm）を得た。

【0090】

離型剤分散液3（ネオワックスLS）：

ネオワックスLS（ヤスハラケミカル社製、軟化点110℃）200部、イオン交換水784部、アニオン性界面活性剤（日本油脂社製：ニューレックスR）16部をオートク

レーブ中で溶解後、ホモジナイザーで分散させて離型剤分散液 3（平均粒径 210 nm）を得た。

【0091】

（着色剤分散液の製造）

シアン着色剤分散液 C1:

顔料 C. I. ピグメントブルー	15 : 3	50 部
ドデシル硫酸エステル Na 塩		10 部
イオン交換水		200 部

上記材料をサンドグライNDERミルで分散させ、体積平均粒子径（D50）が 170 nm の着色剤分散液 C1 を得た。

【0092】

マゼンタ着色剤分散液 M1:

顔料を C. I. ピグメントレッド 122 に変更した以外は、シアン着色剤分散液 C1 の製造方法と同様の方法でマゼンタ着色剤分散液 M1 を得た。顔料微粒子の体積平均粒子径（D50）は 180 nm であった。

イエロー着色剤分散液 Y1:

顔料を C. I. ピグメントイエロー 74 に変更した以外は、シアン着色剤分散液 C1 の製造方法と同様の方法でイエロー着色剤分散液 Y1 を得た。顔料微粒子の体積平均粒子径（D50）は 150 nm であった。

ブラック着色剤分散液 K1:

顔料をカーボンブラック（モーガル L；キャボット社製）に変更した以外は、シアン着色剤分散液 C1 の製造方法と同様の方法でブラック着色剤分散液 K1 を得た。顔料微粒子の体積平均粒子径（D50）は 160 nm であった。

【0093】

（トナー粒子の製造）

以下、特記しない限り、分散液の重量は「固形分重量」を意味するものとする。

実施例 1:

（コア粒子の形成）

温度計、冷却管、攪拌機を取り付けた、4 つ口フラスコに、離型剤分散液 1 を 75 g、離型剤分散液 3 を 75 g、着色剤分散液 C1 を 28 g、アニオン性界面活性剤（日本油脂社製：ニューレックス R）6.4 g を投入し、280 rpm で 40 分間攪拌した。1 N の NaOH 水溶液にて pH を 10 に調整した後、10 wt % 塩化マグネシウム水溶液 24 g を 10 分間かけて滴下し、その後 60℃ まで昇温して 2 時間保持した。

【0094】

（シェル層の形成）

結晶性樹脂 1 分散液 85 g、PES 1 分散液 15 g を予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、85℃ に昇温し 0.5 時間保持した。さらに、結晶性樹脂 1 分散液 85 g、PES 1 分散液 15 g を予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、10 wt % 塩化マグネシウム水溶液 8 g を再滴下し、85℃ で 0.5 時間保持した。さらに、結晶性樹脂 1 分散液 42.5 g、PES 1 分散液 7.5 g を予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、85℃ で 0.5 時間保持した。得られた分散液を少量サンプリングして遠心分離機にかけ、上澄み液が透明になっていることを確認後、アニオン性界面活性剤（日本油脂社製：ニューレックス R）4.8 g を一気に加えた。その後、94℃ まで昇温し 1 時間保持した。冷却し、洗浄し、乾燥させてトナー粒子を得た。トナー粒子の粒径は 6.0 μm、円形度は 0.984 であった。

【0095】

実施例 2:

（コア粒子の形成）

温度計、冷却管、攪拌機を取り付けた、4 つ口フラスコに、離型剤分散液 1 を 75 g、離型剤分散液 3 を 75 g、着色剤分散液 C1 を 28 g、アニオン性界面活性剤（日本油脂

社製：ニューレックスR) 6.4 gを投入し、280 rpmで40分間攪拌した。1 NのNaOH水溶液にてpHを10に調整した後、10 wt %塩化マグネシウム水溶液24 gを10分間かけて滴下し、その後60℃まで昇温して2時間保持した。

【0096】

(シェル層の形成)

結晶性樹脂1分散液100 gを系に徐々に添加した後、85℃に昇温し0.5時間保持した。さらに、結晶性樹脂1分散液100 gを系に徐々に添加した後、10 wt %塩化マグネシウム水溶液8 gを再滴下し、85℃で0.5時間保持した。さらに、結晶性樹脂1分散液50 gを系に徐々に添加した後、85℃で0.5時間保持した。得られた分散液を少量サンプリングして遠心分離機にかけ、上澄み液が透明になっていることを確認後、アニオン性界面活性剤(日本油脂社製：ニューレックスR) 4.8 gを一気に加えた。その後、94℃まで昇温し1時間保持した。冷却し、洗浄し、乾燥させてトナー粒子を得た。トナー粒子の粒径は6.0 μm、円形度は0.984であった。

【0097】

実施例3：

(コア粒子の形成)

温度計、冷却管、攪拌機を取り付けた、4つ口フラスコに、離型剤分散液1を75 g、離型剤分散液3を75 g、着色剤分散液C1を28 g、アニオン性界面活性剤(日本油脂社製：ニューレックスR) 6.4 gを投入し、280 rpmで40分間攪拌した。1 NのNaOH水溶液にてpHを10に調整した後、10 wt %塩化マグネシウム水溶液24 gを10分間かけて滴下し、その後60℃まで昇温して2時間保持した。

【0098】

(シェル層の形成)

結晶性樹脂1分散液72 g、PES1分散液28 gを予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、85℃に昇温し0.5時間保持した。さらに、結晶性樹脂1分散液72 g、PES1分散液28 gを予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、10 wt %塩化マグネシウム水溶液8 gを再滴下し、85℃で0.5時間保持した。さらに、結晶性樹脂1分散液36 g、PES1分散液14 gを予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、85℃で0.5時間保持した。得られた分散液を少量サンプリングして遠心分離機にかけ、上澄み液が透明になっていることを確認後、アニオン性界面活性剤(日本油脂社製：ニューレックスR) 4.8 gを一気に加えた。その後、94℃まで昇温し1時間保持した。冷却し、洗浄し、乾燥させてトナー粒子を得た。トナー粒子の粒径は6.0 μm、円形度は0.984であった。

【0099】

実施例4：

結晶性樹脂1分散液を結晶性樹脂2分散液に、シェル化温度85℃を90℃に変更した以外、実施例1と同様の方法で、トナー粒子を得た。トナー粒子の粒径は5.6 μm、円形度は0.980であった。

実施例5：

結晶性樹脂1分散液を結晶性樹脂3分散液に、離型剤分散液1を離型剤分散液2に、シェル化温度85℃を62℃に変更した以外、実施例1と同様の方法で、トナー粒子を得た。トナー粒子の粒径は6.2 μm、円形度は0.990であった。

【0100】

実施例6：

(コア粒子の形成)

温度計、冷却管、攪拌機を取り付けた、4つ口フラスコに、離型剤分散液2を75 g、離型剤分散液3を75 g、着色剤分散液C1を28 g、アニオン性界面活性剤(日本油脂社製：ニューレックスR) 6.4 gを投入し、280 rpmで40分間攪拌した。1 NのNaOH水溶液にてpHを10に調整した後、10 wt %塩化マグネシウム水溶液24 gを10分間かけて滴下し、その後60℃まで昇温して2時間保持した。

【0101】

(シェル層の形成)

結晶性樹脂3分散液95g、PES1分散液5gを予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、62℃に昇温し0.5時間保持した。さらに、結晶性樹脂3分散液95g、PES1分散液5gを予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、10wt%塩化マグネシウム水溶液8gを再滴下し、62℃で0.5時間保持した。さらに、結晶性樹脂3分散液47.5g、PES1分散液2.5gを予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、62℃で0.5時間保持した。得られた分散液を少量サンプリングして遠心分離機にかけ、上澄み液が透明になっていることを確認後、アニオン性界面活性剤(日本油脂社製:ニューレックスR)4.8gを一気に加えた。その後、89℃まで昇温し1時間保持した。冷却し、洗浄し、乾燥させてトナー粒子を得た。トナー粒子の粒径は6.0μm、円形度は0.986であった。

【0102】

実施例7:

(コア粒子の形成)

温度計、冷却管、攪拌機を取り付けた、4つ口フラスコに、離型剤分散液1を15g、離型剤分散液3を15g、着色剤分散液C1を28g、アニオン性界面活性剤(日本油脂社製:ニューレックスR)6.4gを投入し、280rpmで40分間攪拌した。1NのNaOH水溶液にてpHを10に調整した後、10wt%塩化マグネシウム水溶液5gを10分間かけて滴下し、その後60℃まで昇温して2時間保持した。

【0103】

(シェル層の形成)

結晶性樹脂1分散液85g、PES1分散液15gを予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、85℃に昇温し0.5時間保持した。さらに、結晶性樹脂1分散液85g、PES1分散液15gを予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、10wt%塩化マグネシウム水溶液20gを再滴下し、85℃で0.5時間保持した。さらに、結晶性樹脂1分散液85g、PES1分散液15gを予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、10wt%塩化マグネシウム水溶液20gを再滴下し、85℃で0.5時間保持した。さらに、結晶性樹脂1分散液85g、PES1分散液15gを予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、85℃で0.5時間保持した。さらに、結晶性樹脂1分散液59.5g、PES1分散液10.5gを予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、85℃で0.5時間保持した。得られた分散液を少量サンプリングして遠心分離機にかけ、上澄み液が透明になっていることを確認後、アニオン性界面活性剤(日本油脂社製:ニューレックスR)4.8gを一気に加えた。その後、94℃まで昇温し1時間保持した。冷却し、洗浄し、乾燥させてトナー粒子を得た。トナー粒子の粒径は6.0μm、円形度は0.980であった。

【0104】

実施例8:

(コア粒子の形成)

温度計、冷却管、攪拌機を取り付けた、4つ口フラスコに、離型剤分散液1を150g、離型剤分散液3を125g、着色剤分散液C1を28g、アニオン性界面活性剤(日本油脂社製:ニューレックスR)6.4gを投入し、280rpmで40分間攪拌した。1NのNaOH水溶液にてpHを10に調整した後、10wt%塩化マグネシウム水溶液44gを10分間かけて滴下し、その後60℃まで昇温して2時間保持した。

【0105】

(シェル層の形成)

結晶性樹脂1分散液85g、PES1分散液15gを予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、85℃に昇温し0.5時間保持した。さらに、結晶性樹脂1分散液85g、PES1分散液15gを予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、10wt%塩化マグネシウム水溶液20gを再滴下し、85℃で0.5時間保持

した。さらに、結晶性樹脂1分散液85g、PES1分散液15gを予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、10wt%塩化マグネシウム水溶液20gを再滴下し、85℃で0.5時間保持した。さらに、結晶性樹脂1分散液85g、PES1分散液15gを予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、85℃で0.5時間保持した。さらに、結晶性樹脂1分散液59.5g、PES1分散液10.5gを予め混合し、得られた混合分散液を系に徐々に添加した後、85℃で0.5時間保持した。得られた分散液を少量サンプリングして遠心分離機にかけ、上澄み液が透明になっていることを確認後、アニオン性界面活性剤（日本油脂社製：ニューレックスR）4.8gを一気に加えた。その後、94℃まで昇温し1時間保持した。冷却し、洗浄し、乾燥させてトナー粒子を得た。トナー粒子の粒径は6.0 μ m、円形度は0.981であった。

【0106】

実施例9：

離型剤分散液3を使用することなく、離型剤分散液1を150g使用した以外、実施例1と同様の方法で、トナー粒子を得た。トナー粒子の粒径は6.0 μ m、円形度は0.984であった。

実施例10：

結晶性樹脂1分散液を結晶性樹脂3分散液に、シエル化温度85℃を62℃に変更した以外、実施例1と同様の方法で、トナー粒子を得た。トナー粒子の粒径は6.0 μ m、円形度は0.990であった。

【0107】

比較例1：

温度計、冷却管、攪拌機を取り付けた、4つ口フラスコに、PES2分散液75g、結晶性樹脂1分散液425g、アニオン性界面活性剤（日本油脂社製：ニューレックスR）6.4gを投入し、280rpmで40分間攪拌した。離型剤分散液1を75g、着色剤分散液C1を48gを投入し、1NのNaOH水溶液にてpHを10に調整した。10wt%塩化マグネシウム水溶液80gを10分間かけて滴下し、その後56℃まで一気に昇温して2時間保持した。

アニオン性界面活性剤（日本油脂社製：ニューレックスR）4.8gを一気に加えた。その後、92℃まで昇温し1時間保持した。冷却し、洗浄し、乾燥させてトナー粒子を得た。トナー粒子の粒径は5.8 μ m、円形度は0.982であった。

【0108】

比較例2：

シエル層の形成工程において、結晶性樹脂1分散液85g、PES1分散液15gの添加を全て、PES1分散液100gの添加に、結晶性樹脂1分散液42.5g、PES1分散液7.5gの添加をPES1分散液50gの添加に変更した以外、実施例1と同様の方法で、トナー粒子を得た。トナー粒子の粒径は5.8 μ m、円形度は0.982であった。

【0109】

比較例3：

シエル層の形成工程において、結晶性樹脂1分散液85g、PES1分散液15gの添加を全て、結晶性樹脂1分散液60g、PES1分散液40gの添加に、結晶性樹脂1分散液42.5g、PES1分散液7.5gの添加を結晶性樹脂1分散液30g、PES1分散液20gの添加に、シエル化温度85℃を90℃に変更した以外、実施例1と同様の方法で、トナー粒子を得た。トナー粒子の粒径は5.8 μ m、円形度は0.984であった。

【0110】

比較例4：

シエル層の形成工程において、結晶性樹脂1分散液85g、PES1分散液15gの添加を全て、結晶性樹脂4分散液85g、PES1分散液15gの添加に、結晶性樹脂1分散液42.5g、PES1分散液7.5gの添加を結晶性樹脂4分散液42.5g、PES1分散液7.5gの添加に変更した以外、実施例1と同様の方法で、トナー粒子を得た。トナー粒子の粒径は5.8 μ m、円形度は0.984であった。

S 1 分散液 7. 5 g の添加に変更した以外、実施例 1 と同様の方法で、トナー粒子を得た。トナー粒子の粒径は 5. 6 μ m、円形度は 0. 9 9 0 であった。

【0 1 1 1】

比較例 5：

シェル層の形成工程において、結晶性樹脂 1 分散液 8 5 g、P E S 1 分散液 1 5 g の添加を全て、結晶性樹脂 5 分散液 8 5 g、P E S 1 分散液 1 5 g の添加に、結晶性樹脂 1 分散液 4 2. 5 g、P E S 1 分散液 7. 5 g の添加を結晶性樹脂 5 分散液 4 2. 5 g、P E S 1 分散液 7. 5 g の添加に、シェル化温度 8 5 $^{\circ}$ C を 9 2 $^{\circ}$ C に変更した以外、実施例 1 と同様の方法で、トナー粒子を得た。トナー粒子の粒径は 5. 4 μ m、円形度は 0. 9 8 3 であった。

【0 1 1 2】

比較例 6：

コア粒子の形成工程において、離型剤分散液 1 を使用することなく、離型剤分散液 3 を 1 5 0 g 使用した以外、実施例 1 と同様の方法で、トナー粒子を得た。トナー粒子の粒径は 5. 8 μ m、円形度は 0. 9 8 4 であった。

【0 1 1 3】

【表 1】

コア														
樹脂 A					樹脂 B			WAX1				WAX2		
樹脂	軟化点 (°C)	含有量 (総コア樹脂 重量比)	樹脂	軟化点 (°C)	含有量 (総コア樹脂 重量比)	種類	品名	軟化点 (°C)	添加量	種類	品名	軟化点 (°C)	添加量	
1	—	—	—	—	—	イソテル WAX	WEP- 5RF	82	30%	PE	ネオワッ クス LS	110	30%	
2	—	—	—	—	—	イソテル WAX	WEP- 5RF	82	30%	PE	ネオワッ クス LS	110	30%	
3	—	—	—	—	—	イソテル WAX	WEP- 5RF	82	30%	PE	ネオワッ クス LS	110	30%	
4	—	—	—	—	—	イソテル WAX	WEP- 5RF	82	30%	PE	ネオワッ クス LS	110	30%	
5	—	—	—	—	—	イソテル WAX	WE-2	60	30%	PE	ネオワッ クス LS	110	30%	
6	—	—	—	—	—	イソテル WAX	WE-2	60	30%	PE	ネオワッ クス LS	110	30%	
7	—	—	—	—	—	イソテル WAX	WEP- 5RF	82	3.2%	PE	ネオワッ クス LS	110	3.2%	
8	—	—	—	—	—	イソテル WAX	WEP- 5RF	82	32%	PE	ネオワッ クス LS	110	27%	
9	—	—	—	—	—	イソテル WAX	WEP- 5RF	82	60%	—	—	—	—	
10	—	—	—	—	—	イソテル WAX	WEP- 5RF	82	30%	PE	ネオワッ クス LS	110	30%	
実施例														

※離型剤の添加量はシエル用樹脂に対する重量比で示す。但し、「*」はコア用樹脂(固形分)に対する重量比である。

【0114】

【表 2】

		シェル				
		結晶性 PES			非晶質樹脂 1	
		樹脂	軟化点 (°C)	含有量 (シェル用樹脂比重量%)	樹脂	軟化点 (°C)
実施例	1	結晶性樹脂 1	91	85%	PES1	105
	2	結晶性樹脂 1	91	100%	—	—
	3	結晶性樹脂 1	91	72%	PES1	105
	4	結晶性樹脂 2	117	85%	PES1	105
	5	結晶性樹脂 3	64	85%	PES1	105
	6	結晶性樹脂 3	64	95%	PES1	105
	7	結晶性樹脂 1	91	85%	PES1	105
	8	結晶性樹脂 1	91	85%	PES1	105
	9	結晶性樹脂 1	91	85%	PES1	105
	10	結晶性樹脂 3	64	85%	PES1	105

※離型剤の添加量はシェル用樹脂に対する重量比で示す。
但し、「*」はコア用樹脂(固形分)に対する重量比である。

【0115】

【表 3】

コア													
樹脂 A				樹脂 B			WAX1				WAX2		
樹脂	軟化点 (℃)	含有量 (総コア樹脂 重量比)	樹脂	軟化点 (℃)	含有量 (総コア樹脂 重量比)	種類	品名	軟化点 (℃)	添加量	種類	品名	軟化点 (℃)	添加量
1	PES2	108	15%	結晶性樹脂 1	91	85%	イソテル WAX	WEP-5RF	82	15%*	—	—	—
2	—	—	—	—	—	イソテル WAX	WEP-5RF	82	30%	PE	ネオワックス LS	110	30%
3	—	—	—	—	—	イソテル WAX	WEP-5RF	82	30%	PE	ネオワックス LS	110	30%
4	—	—	—	—	—	イソテル WAX	WEP-5RF	82	30%	PE	ネオワックス LS	110	30%
5	—	—	—	—	—	イソテル WAX	WEP-5RF	82	30%	PE	ネオワックス LS	110	30%
6	—	—	—	—	—	PE	ネオワックス LS	110	60%	—	—	—	—
比較例													

※離型剤の添加量はシェール用樹脂に対する重量比で示す。但し、「*」はコア用樹脂(固形分)に対する重量比である。

比較例

【0116】

【表 4】

		シェル				
		結晶性 PES			非晶質樹脂 1	
		樹脂	軟化点 (°C)	含有量 (シェル用樹脂比重量%)	樹脂	軟化点 (°C)
比較例	1	—	—	—	—	—
	2	—	—	—	PES1	105
	3	結晶性樹脂 1	91	60%	PES1	105
	4	結晶性樹脂 4	51	85%	PES1	105
	5	結晶性樹脂 5	125	85%	PES1	105
	6	結晶性樹脂 1	91	85%	PES1	105

※離型剤の添加量はシェル用樹脂に対する重量比で示す。
但し、「*」はコア用樹脂(固形分)に対する重量比である。

【0117】

なお、各実施例および比較例においてはシアントナー粒子を得ただけでなく、シアン着色剤分散液 C 1 の代わりにマゼンタ着色剤分散液 M 1、イエロー着色剤分散液 Y 1 またはブラック着色剤分散液 K 1 を使用した以外、シアントナー粒子の製法と同様にして、マゼンタトナー粒子、イエロートナー粒子およびブラックトナー粒子も得た。

【0118】

(トナーの製造)

得られたトナー粒子に対して、外添剤として疎水性シリカ（ヘキストジャパン社製；H 2000、15 nm）を 0.8 重量%、疎水性チタニア（チタン工業社製；STT30A、30 nm）を 0.4 重量%の割合で加え、これらをヘンシェルミキサーにより混合して添加処理を行い、トナーを得た。

【0119】

(トナー評価)

<耐熱保管性>

シアントナー 20 g を 50 ml ガラス瓶に入れ、50℃の高温下に 24 時間放置後、そのトナーを目視で確認することにより耐熱保管性を評価した。

○：凝集トナーがなく、全く問題なし；

△：軽い軟凝集が存在するが、軽い力ですぐ解れ、実用上問題ないもの；

×：強い凝集塊が存在し、容易には解れないもので実用上問題あり。

【0120】

以下、各実施例または比較例で得られた 4 色のトナーを実機に搭載して評価した。カラーレーザープリンタ（magicolor2300DL；ミノルタキューエムエス社製）を用いた。

<定着性；非オフセット温度幅>

マシンの定着器の定着温度を任意に変更できるよう改造した。定着ローラの温度を変化させ、低温側は合計付着量 15 g/m^2 の 3 色（Y, M, C）を重ね合わせたベタ画像を画だした。高温側は付着量 $0 \sim 5.0 \text{ g/m}^2$ の単色のグラデーション画像を各色で画だした。定着ローラ通過後の紙上の画像を観察した。いずれの画像においても低温オフセットおよび高温オフセットが発生しない定着温度幅（非オフセット温度幅）によって評価を行った。紙は CF900 用標準紙の CF ペーパー（坪量 80 g/m^2 ）を用いた。オフセットがわずかでも確認できるものは不良とした。

○：非オフセット温度幅が 40℃以上であった；

△：非オフセット温度幅が30℃以上40℃未満であった；

×：非オフセット温度幅が30℃未満であった。

【0121】

＜低温定着性・折り曲げ試験＞

上記非オフセット温度幅の評価方法において130℃で複写紙（記録媒体）上に定着された複写画像（ベタ画像）を真中から2つに折り曲げて画像の剥離を目視にて判断した。

◎：媒体が露出する剥離や媒体が露出するわけではないが画像表面が剥離する表面剥離が画像上になく、実用上問題なし；

○：媒体が露出する剥離は生じないが、表面剥離が生じた；

△：媒体が露出する剥離が線状に生じ、実用上問題あり；

×：媒体が露出する剥離が幅広く生じ、実用上問題あり。

【0122】

＜耐久性（耐破碎性）＞

L/L環境（10℃、15％）において白紙で2000枚の耐久試験を行った後、評価トナーを取り出して、反射型電子顕微鏡を用いて、1000倍の倍率で視野を変えて観察を5回行い、トナー500個中の破碎トナーの平均個数で行った。評価基準を以下に示す。

○：破碎トナーが全くなく、実用上問題ないもの；

△：破碎トナーが1～9個存在するが、実用上問題ないもの；

×：破碎トナーが10個以上存在し、実用上問題あるもの。

【0123】

＜フィルミング性（BS含む）＞

L/L環境の初期およびN/N環境（23℃、45％）の初期及び2000枚連続複写後（耐久後）にそれぞれ感光体上、中間転写体上を目視で評価した。連続複写は所定のプリントパターンでC/W比が6％の条件で行った。

○：感光体および中間転写体のいずれにもフィルミングおよびBSの発生がなかった；

△：感光体または中間転写体の一方でフィルミングおよびBSの発生がみられるが、画像上では見られず、実用上問題なし；

×：感光体または中間転写体の少なくとも一方でフィルミングおよびBSの発生があり、画像上でも確認でき、実用上問題あり。

【0124】

＜画像保管性＞

所定のプリントパターンでC/W比が6％の条件で10枚連続複写を行った。複写は両面に行った。得られた画像を10枚重ねて、50℃で24時間保管した。その後の状態を観察して評価した。

○：画像同士のくっつきが見られず、実用上問題ない；

×：画像同士のくっつきがあり、はがすと画像欠損ができ、実用上問題がある。

【0125】

【表 5】

	評価結果					
	一般					
	低温 定着性	非オフセット 温度幅	耐熱 保管	画像 保管性	耐破碎性	フィルミング
実施例 1	◎	○	○	○	△	○
実施例 2	◎	○	○	○	△	○
実施例 3	◎	○	○	○	△	○
実施例 4	◎	○	○	○	△	○
実施例 5	◎	○	○	○	△	○
実施例 6	◎	○	○	○	△	○
実施例 7	◎	△	○	○	△	○
実施例 8	◎	○	△	○	△	○
実施例 9	◎	△	○	○	△	○
実施例 10	◎	△	○	○	△	○
比較例 1	○	△	×	○	×	×
比較例 2	×	×	×	○	○	○
比較例 3	△	×	○	○	×	×
比較例 4	○	×	×	×	×	×
比較例 5	×	×	○	○	○	○
比較例 6	○	○	○	○	×	×

【0126】

<測定方法>

(離型剤軟化点)

示差走査熱量計 (DSC-200: セイコー電子社製) を用い、測定する試料 10mg を精密に秤量して、これをアルミニウムパンに入れ、リファレンスとしてアルミナをアルミニウムパンに入れたものを用い、昇温速度 30℃/min で常温から 200℃まで昇温させた後、これを冷却し、昇温速度 10℃/min で 20℃～200℃の間で測定を行ない、メイン吸熱ピークの温度を離型剤軟化点とした。

【0127】

(トナー粒子の粒径、コア粒子の体積平均粒径)

粒径は、コールターマルチサイザー II (ベックマンコールター社製) で測定した。本発明においては、コールターマルチサイザー II を用い、粒度分布を出力するインターフェース (ベックマンコールター社製)、パーソナルコンピュータを接続して使用した。前記コールターマルチサイザー II におけるアパーチャーとしては 50 μm のものを用いて、0.99 μm 以上 (例えば、2～40 μm) のトナーの体積分布を測定して粒度分布および平均粒径を算出した。

(測定条件) (1) アパーチャー: 50 μm (2) サンプル調製法 (トナー粒径の場合): 電解液 (ISOTON-II-pc (ベックマンコールター社製)) 50～100ml に界面活性剤 (中性洗剤) を適量加えて攪拌し、これに測定試料 10～20mg を加える。この系を超音波分散機にて 1 分間分散処理することにより調製する。(3) サンプル調製法 (コア粒子の粒径の場合) は会合液そのものを、電解液 (ISOTON-II-pc (ベックマンコールター社製)) 50～100ml に適量加えて測定用試料として調製した。

(トナー粒子の円形度)

円形度 = (円相当径から求めた円の周囲長) / (粒子投影像の周囲長)

FPIA-1000 (東亜医用電子株式会社製) により測定した。

(樹脂粒子、顔料粒子、離型剤粒子の粒径測定)
MICROTRAC UPA 150 (日機装株式会社製) により測定した。

【書類名】要約書

【要約】

【課題】 低温定着性および耐熱保管性だけでなく、耐破碎性、耐フィルミング性および画像保管性にも十分に優れ、低温オフセットおよび高温オフセットの発生しない定着温度範囲（非オフセット温度幅）が比較的広い静電荷像現像用トナーを提供すること。

【解決手段】 コア粒子表面にシェル層を有してなるコアシェル構造型トナー粒子を含有する静電荷像現像用トナーであって、コア粒子が極性基を有するワックスおよび着色剤からなり、シェル層が軟化点 6 0 ～ 1 2 0 ℃の結晶性ポリエステル樹脂をシェル層構成樹脂全体の 7 0 ～ 1 0 0 重量%含有することを特徴とする静電荷像現像用トナー。

【選択図】 なし

特願 2 0 0 3 - 3 2 9 4 5 3

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [0 0 0 0 0 6 0 7 9]

1. 変更年月日 1 9 9 4 年 7 月 2 0 日

[変更理由] 名称変更

住 所 大阪府大阪市中央区安土町二丁目 3 番 1 3 号 大阪国際ビル
氏 名 ミノルタ株式会社